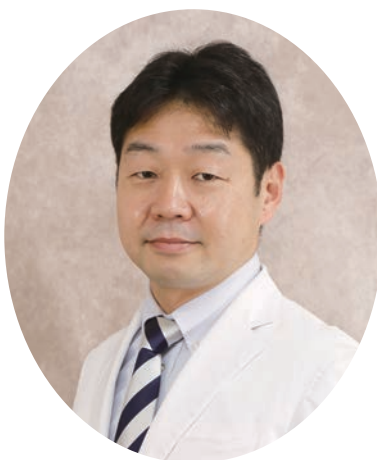


御坊市文化賞 受賞者紹介

秘書室 ☎0738-23-5536

市では、文化の発展に貢献された方をたたえ、一層のご活躍を願って文化賞の贈呈を行っています。
今年は、竹内一郎氏と御坊日舞の会が文化賞の栄に輝かれました。



たけうち いちろう
竹内 一郎 氏

氏は御坊市立御坊小学校を卒業後、智辯学園和歌山中学校・高等学校を経て、群馬大学医学部に入学、平成9年に群馬大学医学部を卒業後、榊原記念病院、北里大学病院などで救急医学、循環器内科学の研究を積んだ。平成19年から北里大学病院 救命救急災害医療センターの講師、准教授を経て、平成29年に横浜市立大学救急医学教室へ主任教授として赴任した。同時に附属高度救命救急センター長並びに地域の救急を司る横浜市メディカルコントロール協議会会長として、横浜市や神奈川県救急医療の中心的な役割を果たしている。

新型コロナウイルス感染症においては高度救命救急センター長として最前線で治療に当たりながら横浜全体の急性期医療の責任者として尽力してきた。令和2年2月3日、横浜港に停泊した外航客船ダイヤモンドプリンセス号において、約3,700人の乗員・乗客のうち、700人以上の方が新型コロナウイルス感染症の陽性が確認され、多数の患者の搬送先が課題となった。当時、新型コロナウイルスがどのような病気で、どう感染を防ぐのかなど未知な部分が多い中、氏は、神奈川県DMATの統括として行政と連携し、船内で発生した陽性患者を人工呼吸器が必要な重症者、中等症者、軽症者に層別化したうえで搬送先を調整し、医療崩壊が起きないように対応した。この重症度・緊急度に応じた横浜の取り組みは、全国のコロナ対策の見本となった。

その後も新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、重症化する患者が増加する中、重症化した場合に命をつなぐ切り札となるのが、体外式膜型人工肺（ECMO＝エクモ）である。氏がセンター長を務める横浜市大高度救命救急センターでは、人工呼吸器やECMOを必要とする重症患者を多数受け入れ、ECMOセンターとして機能している。また治療成績は生存率90%と世界トップレベルの治療成績を維持している。このように、氏の医療における先進的な取組並びに功績は極めて大きいものがあり、市民文化賞を授与するものである。



ご ぼうにち ぶ かい
御坊日舞の会

御坊日舞の会は、昭和41年に「いづみ会」が「御坊日舞の会」に改名したのが始まりで、古き良き伝統芸能を後世に伝えていくため、若柳流と花柳流の2つの流派が協力し、56年もの長きにわたり活動されている。その活動は日本舞踊の魅力である着物を着た所作や立ち振る舞いを原点とした謙譲の美徳などを伝えるとともに、子どもたちには挨拶や礼儀をはじめ、感謝の心を持つ大切さを育むなど、人としての成長にも取り組んでいる。

このように、長期にわたり活動してきた御坊日舞の会であるが、その道のりは決して平坦ではなく、習い事の多様化などにより稽古場から子どもの姿が少なくなり、またカラオケが盛んになると演歌に合わせて踊る新舞踊が流行するなど、時代の影響を大きく受けることになった。そのような状況を打開するため、新舞踊を取り入れることには戸惑いがあったものの、舞踊に携わる中で古典的な形態を守りつつも新しいジャンルに挑戦していきたいとの思いに立ち、新舞踊の振り付けや指導も行うなど活躍の場を広げてきた。これまでの主な活動として、ごぼう商工祭や道成寺会式、各地域の盆踊りなど、各種イベントへの参加や老人ホームへの出張交流など、地域に根ざした文化活動に取り組んでいる。令和3年には、文化の国体とも言われる国民文化祭において、「道成寺釣鐘お里がえり～逸見万寿丸生誕700年祭～」に参加し、ジャンジャカ踊りを披露した。

このように、御坊日舞の会が長年にわたり、日本舞踊の伝承と普及啓発に広く努められ、本市の地域文化向上に寄与された功績は多大なものがある。